

正しょう

官かん

塚づか

むかしむかしのこと。

吉川城主の将監さまは、生まれつき齒が弱いたちでのう。いつも虫齒をわずらつておつたど。どうかしてなおしたいものだど、朝には神にいのり、夜には仏を拝む毎日であつたど。あちらに虫齒に効く薬があると聞けば、家来をつかわして取りよせてはためし、こちらに痛みを和らげてくれる祈禱師があると聞けば、呼んで祈禱してもらつておつた。あれやこれやとためしたものの、薬も効かんし、いのりも通じん。そうこうしているうちに、虫齒はひどくなるいつぼうでのう。すっかり氣弱になつた将監さまは、人に会うこともおつくうがり、お城の中に引きこもりがちになつたそうな。そんなあるとき、病で床にふしたが、氣力のおとろえている身なので、医者がいろいろ手をつくしたにもかかわらず、息を引き取つてしまわれた。すると、どうしたわけか将監さまは、虫齒がもとで死んでしもうたといううわさが広がつたど。お城の近くに墓がつくられたが、なにしろ城主さまの死じゃ。近郷近在の人たちが、次から次へとお墓参りに来たそうな。

あるとき、ひとりの男が墓の前で一心にお経きょうをあげておった。やがて、お墓参りを
すませて立ち上がった男は、自分のほおに手を当てて、

「あれ、不思議なこっちゃ。

さきほどの痛みいたがうそのよ
うじゃて。」

と、つぶやいたと。実は、こ
の男、将監さまと同じように、
歯をわずらっておったのじゃ
と。さつきまで虫歯で苦しん
でいたのが、お参りを終えた
とたんに、すつぱりとよくな
っていたのに、びっくりする
やらうれしいやら。

この話は、人々の口から口
へ、村から村へ伝わり、

「将監さまは、ご自分も虫歯



で苦しまれたので、われわれをその苦しみから救すくってくださるにちがいない。」

という、うわさが広がっていった。

それからというものは、遠く三河みかわの方からも、お参りに来る人が後をたたず、虫歯の苦しみから救われるという話は、広く知れわたったということじゃそうな。そして、だれから始めたというわけでもなく、歯の痛みが治なつたら、お礼参りには歯の数だけ焼き豆やまめを供そなえるようになったと。

こうして、人々は、この墓を正官塚と呼んで永ながく信しん仰こうを続けたそうな。

吉田地区に伝わる話です。

吉田町の吉川城址と国道一五五号線せんをはさんで、「正官田」というところがあります。ここの木立ちに囲まれた中に、小さな社があります。これが「正官塚」です。今でも、お参りする人がたえません。